

半七捕物帳

筆屋の娘

岡本綺堂

青空文庫

久し振りで半七老人に逢うと、それがまた病みつきになって、わたしはむやみに老人の話が聴きたくなつた。「蝶合戦」の話を聞いたのち四、五日を経て、わたしはこの間の礼ながらに赤坂へたずねてゆくと、老人は縁側に出て金魚鉢の水を替えていた。けさも少し陰つて、狭い庭の青葉は雨を待つように、頭をうなだれて、うす暗いかげを作っていた。

「あなたはつけが悪い。きょうも降られそうですぜ」と、半七老人は笑っていた。

金魚の手がえしは梅雨つゆのうちが一番むずかしいなどという話が出た。それからだんだんに糸を引いて、わたしはいつもの話の方へ引き寄せてゆくと、老人は「又ですかい」とも云わずに、けさは自分から進んですらすらと話し出した。

「あれはいつでしたっけね」と、老人は眼をつぶりながら考えていた。「そうです、そうです。あの太郎稻荷がはやり出した年ですから慶応三年の八月、まだ残暑の強い時分でした。御存知でしょう、浅草田圃たんぼの太郎様を……。あのお稻荷様は立花様しもの下屋敷にあつて、一時ひどく廃すたれていたんですが、どういふ訳かこの年になつて俄かに繁昌して、近所へ茶店や食い物屋がたくさんに店を出して、参詣人が毎日ぞろぞろ押し掛けるという騒ぎでしたが、

おまん、妹の方は十六でお年としと云っていましたが、姉妹ともに色白きりようの容貌好しで……。まあ、そういう看板がふたり坐つていれば、店は自然と繁昌するわけですが、まだ其のほかには秘伝があるので……。誰でもその店へ行つて筆を買いますと、娘達がきつとその穂を舐なめて、舌の先で毛を揃えて、鞘に入れて渡してくれるんです。白い毛の筆を買えば、口紅の痕までがほんのりと残つていようという訳ですから、若い人達はみんな嬉しがります。それが評判になつて、近所のお寺の坊さんや本郷から下谷浅草界隈の屋敷者などが、わざわざこの東山堂までやつて来て、美しい娘の舐めてくれた筆を買つて行くという訳で、誰が云い出したとも無しに『舐め筆』という名を付けられてしまつて、広徳寺前の一つ

の名物のようになっていたんです。その姉娘が急に死んだのですから、近所では大評判でしたよ」

姉娘のおまんは急死したと披露されているけれども、どうも変死らしいという噂が立った。ここらを持ち場に行っている下つ引の源次がそれを聞き込んで、だんだん探索を進めてゆくと、おまんは確かに変死であると判った。七月二十五日の夕方から彼女は気分が悪いと云い出した。最初はさしたることもあるまいと思つて、買いくすりなどを飲ませていると、夜の五ツ（午後八時）頃になつて、いよいよひどく苦しみ出して、しまいには吐血した。家内の者もびっくりして、すぐ医者を呼んで来たがもう遅かった。

おまんは衾よぎや蒲団を搔きむしって苦しんで、とうとう息が絶えてしまった。医者は何かの中毒であろうと診断した。

東山堂では医者にどう頼んだか知らないが、ともかくも食あたりというところで、その明くる日に葬とむらい式を出そうとした。その報告を源次から受け取って、半七も首をかしげた。彼は念のために八丁堀同心へその次第を申し立てると、不審の筋ありということで葬式はひとまず差し止められた。町奉行所から当番の与力や同心が東山堂へ出張って、式かたのごとくにおまんの死体を検視すると、かれは普通の食あたりでなく、たしかに毒薬を飲んだのであることが判った。しかしその毒薬を自分で飲んだのか、人に飲まされたのか、自殺か毒殺かは容易に判らなかつた。検視が済んで、お

まんの埋葬はとどこおりなく許されたが、あとの詮議がすこぶるむずかしくなった。

自害にしても其の事情はよく取り調べなければならぬ。他人の毒害となれば勿論重罪である。いずれにしても、等閑なおよりには致されぬ事件と認められて、第一の報告者たる半七が、その探索を申し付けられた。半七はすぐ源次を近所の小料理屋へ連れて行つた。

「おい、源次。ちよいと面白そうな筋だが、なにしろ娘はゆうべ死んで、もうすっかり後始末をしまったところへ乗り込んで来たんだから、場所にはなんにも手がかりはねえ。どうしたもんだらう。おめえ、なんにも当りはねえのか」

「そうですねえ」と、源次は首をひねった。誰のかんがえも同じことで、舐め筆の娘の変死はいずれ色恋のもつれであろうと彼は云った。

「そこで、自分で毒を食ったのか、それとも人に毒を飼われたのか」

「親分はどう睨んだか知らねえが、わっしは自分でやったんじやあるめえと思えます。なにしろ其の日の夕方までは店できやつきやつとふざけていたそうですからね。それに近所の噂を聞いても、別に死ぬような仔細は無いらしいんです」

「そうか」と、半七はうなずいた。「そこで娘に毒を食わしたのは内の者か、外の者か」

「さあ。そこまでは判らねえが、まあ内の者でしょうね。わつしは妹じゃあないかと思うんですが……。別に証拠ありませんが、なにか一人の男を引つ張り合つたとかいうような訳で……。それとも姉に婿を取つて身しんしょう上しょうを譲られるのが口惜くやしいとかいうので……。どうでしょう」

そんなことが無いでもないと半七は思った。東山堂の店は主人の吉兵衛と女房のお松、姉妹の娘二人のほか二人の小僧とあわせて六人暮らしであつた。小僧の豊蔵はことし十六で、一人の佐吉は十四であつた。主人夫婦が現在の娘を毒害しようとは思われない。二人の小僧も真逆まさかにそんなことを巧もうとは思われない。もし家内のものに疑いのかかるあかつきには、まず妹娘のお年に

眼串めぐしをさされるのが自然の順序であつた。しかしまだ十六の小姑娘のお年がどこで毒薬を手に入れたか、その筋道を考えるのが余ほどむずかしかつた。

「おれの考えじゃあどうも妹らしくねえな。ほかの奴が何か細工をしたんじやあねえか」

「そうでしようか」と、源次はすこし不平らしい顔をしていた。

「そんなら東山堂ではなぜそれを表向きにしねえで、隠密に片付けてしまおうとしたのでしよう。それがおかしいじやありませんか。わつしの鑑定じやあ、親達も薄々それを気付いているが、表向きにすりやあ妹の首に縄がつく。看板娘が一度に二人も無くなつて、おまけに店から引き廻しが出ちやあ、もうこの土地で商売

をしちやあいられねえ。そこを考えて、もう死んだものは仕方がねえと諦めて、とがにん科人を出さねえようにそつと片付けようとしたんだらうと思います」

「それも理窟だ。じゃあ、ともかくもおめえは妹の方を念入りに調べ上げてくれ。おれは又、別の方角へ手を入れて見るから」

「ようござえます」

二人は約束して別れた。その明くる朝、半七が朝飯を食って、これからもう一度下谷へ行ってみようかと思つているところへ、源次が汗を拭きながら駈け込んで来た。

「親分、あやまりました。わっしはまるで見当違いをしていました。舐め筆の娘は、自分で毒を食つたんですよ」

「どうして判った」

「こういう訳です。あの店から、五、六軒先の法衣屋ころもやの筋向うに徳法寺という寺があります。その納所なっしょあがりなに善周という若い坊主がいる。娘の死んだ明くる朝にやつぱり頓死したんだそうで……。それが同じように吐血して、なにか毒を食ったに相違ないということが今朝になって初めて判りました。その善周というのは色の小白い奴で、なんでもふだんから筆屋の娘たちと心安くして、毎日のように東山堂の店に腰をかけていたと云いますから、いつの間にか姉娘とおかしくなっていて、二人が云いあわせて毒を飲んだのだらうと思います。なにしろ相手が坊主じゃあ、とても一緒にはなれませんかからね」

「すると、心中だな」

「つまりそういう理窟になるんですね。男と女とが舞台を変えて、別々に毒をのんで、南無阿弥陀仏を極めたんでしょう。そうなるど、もう手の着けようがありませんね」と、源次はがっかりしたように云った。

若い僧と筆屋の娘とが親しくなつても、男が法衣ころもをまとつていゝる身の上ではとても表向きに添あてい遂げられるはない。男から云い出したか、女から勧めたか、ともかくも心中の約束が成り立つて、二人が分かれ分かれの場所で毒を飲んだ。それは有りそうなことである。二人がおなじ場所で死ななかつたのは、男の身分を憚はばかつたからであろう。僧侶の身分で女と心中したと謳うたわれては、

自分の死後の恥ばかりでなく、ひいては師の坊にも迷惑をかけ、寺の名前にも疵が付く。破戒の若僧もさすがにそれらを懸念して、ふたりは死に場所を変えたのであろう。こう煎じつめてゆくと、二人が本望通りに死んでしまった以上、ほかに詮議の蔓は残ら^{つる}ない筈である。源次が落胆するのも無理はなかった。

「そこで、その坊主には別に書置もなかったらしいか」と、半七は訊いた。

「そんな話は別に聞きませんでした。あとが面倒だと思つて、なんにも書いて置かなかつたんでしよう」

「そうかも知れねえ。それから妹の方には別に變つた話はねえのか」

「妹は先月頃から嫁に行く相談があるんだそうです。馬道うまみちの上

州屋という質屋の息子がひどく妹の方に惚れ込んでしまつて、三百両の支度金でぜひ嫁に貰いたいと、しきりに云い込んで来ているんです。三百両の金もほしいが看板娘を連れて行かれるのも困る。痛いたし痒かゆしというわけで、親達もまだ迷っているうちに、婿取りの姉の方がこんなことになつてしまつたから、妹をよそへやるという訳には行きますめえ。どうなりますかね」

「妹には内証おとこの情夫なんぞ無かつたのか」と、半七は又訊いた。

「さあ、そいつは判りませんね。そこまではまだ手が達とどきませんでした。……」と、源次は頭を搔いた。

「面倒でも、それをもう一度よく突き留めてくれ」

二

源次を帰したあとで、半七は帷子かたびらを着かえて家を出た。彼は下谷へゆく途中、明神下の妹の家をたずねた。

「おや、兄さん。相変らずお暑うござんすね」と、お糸くめは愛想よく兄を迎えた。

「おふくろは……」

「御近所のかたと一緒に太郎様へ……」

「むむ、太郎様か。この頃は滅法界にはやり出したもんだ。おれもこのあいだ行って見てびつくりしたよ。まるで御開帳のような

騒ぎだ」

「あたしもこのあいだ御参詣に行つておどろきました。神様もはやるとなると大変なもんですね」

「時にこんな物を加賀様のお手古てこの人に貰ったから、おふくろにやつてくんねえ」

半七は風呂敷をあけて落雁らくがんの折おりを出した。

「ああ、墨形すみがた落雁。これは加賀様のお国の名物ですつてね。家うちでも一度貰ったことがありました。阿母おつかさんは齒がいいから、こんな固いものでも平気でかじるんですよ」と、お糸は笑つていた。

彼女は茶を淹いれながら、兄に訊いた。

「兄さん。この頃は忙がしいんですか」

「むむ、たいしてむずかしい御用もねえが、広徳寺前にちよつとしたことがあるから、これからそつちへ行つて見ようかと思つて
いる」

「広徳寺前……。舐め筆の娘じゃないの」

「おまえ知つているのか」

「あの娘は姉妹とも三味線堀のそばにいる文字春さんという人のところへお稽古に行つていたんです。妹はまだ行つているかも知れません。その姉さんの方が頓死したというんで、あたしもびつくりしました。毒を飲んだというのはほんとうですか」

「そりやあほんとうだが、自分で飲んだのか、人に飲まされたのか、そのところがまだはつきりとおれの腑に落ちねえ。おまえ、

その文字春という師匠を識っているなら、そこへ行って妹のことを少し訊いて来てくれねえか。妹はどんな女だか、なにか情夫おとこでもあるらしい様子はねえか、東山堂の親達はどんな人間か、そんなことを判るだけ調べて来てくれ」

「よござんす。お午過ぎに行つて訊いて来ましょう」

「如じよさい才もあるめえが、半七の妹だ。うまくやってくれ」

「ほほほほ。あたしは商売違いですもの」

「そこを頼むんだ。うまく行つたら鰻ぐらい買うよ」

妹に頼んで半七はそこを出ると、どこの店でももう日よけをおろして、残暑の強い朝の日は蕎麦屋の店さきに干してあるたくさんの蒸籠せいろうをあかあかと照らしていた。

徳法寺をたずねて住職に逢うと、住職はもう七十くらいの品のいい老僧で、半七の質問に対して一々あきらかに答えた。徒弟の善周は船橋在の農家の次男で、九歳ここのつの秋からこの寺へ来て足かけ十二年になるが、年の割には修行が積んでいる。品行もよい。自分もその行く末を楽しみにしていたのに、なんの仔細でこんな不慮の往生を遂げたのか一向判らない。無論に書置もない、毒藥らしい物もあとに残っていない。したがって詮議のしようもないのに当惑していると、老僧は白い眉をひそめて話した。

筆屋の娘との関係については、かれは絶対に否認した。

「なるほど、近所ずからの事でもあれば、筆屋の店に立ち寄ったこともござろう。娘たちと冗談ぐらいは云ったこともござろう。」

しかし娘といたずら事など、かけても有ろう筈はござらぬ。それは手前が本尊阿弥陀如来の前で誓せいごん言立てても苦しゅうござらぬ。たとい何なんびと人がなんと申そうとも、左様の儀は……」

立派に云い切られて、半七も躊躇した。住職の顔色と口振りとは何の陰影もないらしいことは、多年の経験で彼にもよく判っていた。それと同時に、心中の推定が根本からくつがえされてしまうことを覚悟しなければならなかった。彼は更に第二段の探索に取りかかった。

「いかがでございましょうか。その善周さんという人のお部屋を、ちよつと見せていただく訳にはまいますまいか」

「はい。どうぞこちらへ」

一応ことわつて、半七は硯箱の蓋をあけると、箱のなかには磨り減らした墨と、二本の筆とが見いだされた。筆は二本ながら水筆^{いひつ}で、その一本はまだ新らしく、白い穂の先に墨のあとが薄黒くにじんんでいるだけであつた。半七はその新らしい筆をとつて眺めた。

「この筆はこの頃お買いなすつたんでしようねえ。御存じありませんか」

それは善周が死んだ前日の夕方に買つて来たものらしいと若僧は云つた。いつも東山堂で買うのであるから、それも無論に同じ筆屋で買つて来たのであろうと彼は又云つた。半七は更にその筆の穂を自分の鼻の先へあてて、そつとかいでみた。

「この筆を暫時しばらく拝借して行くわけにはまいりますまいか」

「よろしゅうござる。お持ちください」と、住職は云った。

その筆を懐紙につつんで、半七は部屋を出た。

「善周さんのお葬式とむらいはもう済みましたか」と、彼は帰るときに住職に訊いた。

「きのうの午すぎに検視を受けまして、暑気の折柄でござれば夜分に寺内へ埋葬いたしました」

「左様でございますか。いや、これはどうも御邪魔をいたしました」

寺を出ると、半七はすぐに東山堂へ行つた。娘の葬式はゆうべの筈であったが、俄かに検視が来たために刻限がおくれて、今朝

あらためて、橋場の菩提寺へ送ることになったので、きようは勿論に商売を休んで、店の戸は半分おろしてあった。戸のあいだから覗いて見ると、小僧の一人がぼんやりと坐っていた。

「おい、おい。小僧さん」

半七は外から声をかけると、小僧は入口へ起つて来た。

「皆さんはお送とむらい葬からまだ帰りませんかえ」

「まだ帰りません」

「小僧さん。ちよいと表まで顔を貸してくださいな」

小僧は妙な顔をして表へ出て来たが、かれは半七の顔を思い出したらしく、急に形をあらためて行儀よく立った。

「ゆうべは騒がせて気の毒だったな」と、半七は云った。「とこ

ろで、お前に少し訊きたいことがあるんだが、おととい一昨日かさきおととい一昨日頃、この店へ筆を取り換えに来た人はなかつたかえ。この水筆すいひつだ」

ふところから紙につつんだ水筆を出してみせると、小僧はすぐにうなずいた。

「ありました。おとといのお午過ぎに若い娘が取り換えに来ました」

「どこの子だか知らねえか」

「知りません。この筆を買って帰ってから、いっとき一晌ほど経って又

引っ返して来て、穂の具合が悪いからほかのと取り換えてくれと云って、ほかのと取り換えて貰って行きました」

「ほかには取り換えに来た者はねえか」

「ほかにはありませんでした」

「その娘は幾つぐらいの子で、どんな装なりをしていた」

「十七八でしょう。島田鬻かたに結って、あかい帯をしめて、白い浴ゆ衣かたを着ていました」

「どんな顔だ」

「色の白い可愛らしい顔をしていました。どこかの娘か小間使でしょう」

「その娘は今まで一度も買いに来たことはねえか」

「さあ、どうも見たことはないようです」

「いや、ありがとう」

小僧に別れて、浅草の方角へ足をむけると、半七は往来で源次に出逢った。

「親分。舐め筆の娘はどっちも堅い方で、これまで浮いた噂はなかったようです」と、源次は摺り寄ってささやいた。

「そうか。時に丁度いいところで逢った。おめえこれから浅草へ行つて、庄太にも手を貸してもらつて、上州屋にいる奉公人の身許をみんな洗つて来てくれ。男も女も、みんな調べるんだぜ。いか」

「判りました」

「じゃあ、おめえに預けて俺は帰るぜ。大丈夫だろうな」

「大丈夫です」

それから二、三軒用達しをして、半七は神田の家へ帰った。近所の銭湯で汗を流して来て、これから夕飯を食おうとするところへ、お糸が来た。

「行つて来ましたよ」

「やあ、御苦労。そこでどうだ」

「文字春さんのところへ行つて訊きましたが、舐め筆の娘には姉妹ともに悪い噂なんぞちつとも無いそうです。親達も悪い人じゃあ無いようです」

それは源次の報告と一致していた。心中の事実は跡方もないに決まつてしまった。

三

「でね、兄さん。文字春さんからいろいろの話をお聴いているうちに、あたし少し変だと思ふことがあるんですよ」と、お糸は団扇うちわを軽く使いながら云つた。

「どんなことだ」

「妹のお年ちゃんの方は今でも毎日文字春さんのところへ御稽古に来るんですが、なんでも先月頃から五、六度お年ちゃんが来て稽古をしているのを、窓のそこから首を伸ばして、じつと内を覗いている娘があるんですって」

「十七八の、色白の可愛らしい娘じゃあねえか」と、半七は喙くちを

容れた。

「よく知っているのね」と、お糸は涼しい眼をみはった。「その娘はいつでもお年ちゃんの浚さらっている時に限って、外から覗いているんですって。変じやありませんか」

「それは何処の娘だか判らねえのか」

「そりやあ判らないんですけれど、ほかの人の時には決して立っていたことが無いんだそうです。なにか訳があるんでしょう」

「むむ。訳があるに違げえねえ。それでおれも大抵判った」と、半七はほほえんだ。

「もう一つ斯ういうことがあるんです。文字春さんの家の近所に馬道の上州屋の隠居所があるんです。あのお年ちゃんという子は、

上州屋から容きりよう貌望みで是非お嫁にくれと云い込まれているんだというじゃありませんか。その話はなんでも先月頃から始まったんだということです。ねえ、その先月頃から文字春さんの家のまえに立って、窓からお年ちゃんを覗いている女があるというんですから、その娘はきつと上州屋の隠居所へ来る女で、そつとお年ちゃんを覗いているんだろうと思うんです。文字春さんもそんなことを云っていました。けれども、考えようによつては、それがいろいろに取れますね」

「そこでお前はどうか取る」と、半七は笑いながら訊いた。

その娘は上州屋の奉公人で、三味線堀近所の隠居所へときどき使にくるに相違ないとお糸は云った。自分の邪推かは知らないが、

ひよつとすると其の娘は上州屋の息子となにか情交わけがあつて、今度の縁談について一種の嫉妬ねたみの眼を以てお年を窺っているのではあるまいかと云つた。

「なかなか隅へは置けねえぞ」と、半七は又笑つた。「どうだい。いつそ常磐津の師匠なんぞを止めて御用聞きにならねえか」

「ほほ、随分なことを云う。なんぼあたしだつて、撥ぼちの代りに十手を持つちやあ、あんまり色消しじやありませんか」

「ははは、堪忍しろ。それからどうだと云うんだ」

「もういやよ。あたしなんにも云いませんよ。ほほほほほ。あたしもう姉さんの方へ行くわ」

お糸は笑いながら女房のいる方へ起つてしまった。冗談半分に

聞き流していたものの、妹の鑑定はなかなか深いところまで行き届いていると半七は思った。自分が源次に云いつけて、上州屋の奉公人どもの身許みもとをあらわせたのも、つまりはそれと同じ趣意であつた。そして文字春の窓をたびたびのぞいていた娘と、東山堂へ筆を取り換えに來た娘と、その年頃から人相まで同一である以上、自分の判断のいよいよ誤らないことが確かめられた。半七は生簀いけすの魚を監視しているような心持でその晩を明かした。

あくる朝になつて、源次が來た。その報告によると、上州屋の奉公人は番頭小僧をあわせて男十一人、仲働きや飯炊きをあわせて女四人である。この十五人の身許を洗うにはなかなか骨が折れたが、馬道の庄太の手をかりて、まず一と通りは調べて來たと云

つた。男どもの方は後廻しにして、半七は先ず女の方のしらべを訊くと、仲働きはお清、三十八歳。お丸、十七歳。台所の下女はお軽、二十二歳。お鉄、二十歳というのであつた。

「このお丸というのはどんな女だ」

「芝口の下駄屋の娘で、兄貴は家の職をしていて、弟は両国の生き薬屋ぐすりやに奉公しているそうです」と、源次は説明した。

「よし、判つた。すぐにその女を引き挙げなければならねえ」

「へえ、そのお丸というのがおかしいんですかえ」

「むむ、お丸の仕業しわざに相違ねえ。弟が薬種屋に奉公しているといふなら猶なおのことだ。よく考えてみる。舐め筆の娘の死んだ日にお丸そっくりの女が筆を買いに来て、一晌ときばかり経つて又その筆を

取り換えに来た。そこが手妻てずまだ。取り換えに来たときに、筆の穂へなにか毒薬を塗つて来たに相違ねえ。そうして、ほかの筆と取り換えて、その筆を置いて行つたんだ。勿論、なめ筆の評判を知つての上で巧んだことに決まっている。娘はそれを知らねえで、その筆を売る時にいつもの通りに舐めてやった。買った奴は徳法寺の善周という坊主で、これも又その筆を舐めた。毒の廻り方が早かつたので、娘はその晩に死んだ。坊主の方はあくる朝になつて死んだ。心中でもなんでもねえ。一本の筆が廻り廻つて二人の人間の命を取るようになったので、娘は勿論だが、坊主も飛んだ災難で、訳もわからずに死んでしまつたんだ。可哀そうとも何とも云いようがねえ」

「なるほど、そんな理窟ですかえ」と、源次は溜息をついた。

「それにしても何故なぜそのお丸という女が途方もねえことを巧んだのでしうかね」

「それはまだ確かに判らねえが、おれの鑑定じゃあ多分そのお丸という女は、上州屋の倅と情交わけがあつて、つまり嫉妬から筆屋の娘を殺そうとしたんだらうと思う。だが、上州屋へ嫁に行くといふのは妹の方で、殺されたのは姉の方だ。ここが少し理窟に合わねえように思われるが、お丸という女の料簡じゃあ、そこまでは深く考えねえで、なんでも売り物の筆に毒を塗っておけば、妹の娘が舐めるものと一途いちずに思い込んでいたのかも知れねえ。年の若けえ女なんていうものは案外に無考えだから、おまけにもう眼が

眩くらんでいるから、それできつと仇が打てるものと思つていたんだらう。厄介なことをしやあがつた。人間ふたりを殺してどうなると思つているんだか、考えると可哀そうにもなるよ」

半七も溜息をついた。

「そうになると、その生薬屋に奉公している弟というのも調べなければなりませんね」と、源次は云つた。

「勿論だ。おれがすぐに行つて来る」

支度をして、半七はすぐに両国へゆくと、その薬種屋は広小路に近いところにあつて、間口も可なりに広い店であつた。店では三人ばかりの奉公人が控えていて、帳場には二十二三の若い男が坐つていた。

「こちらに宗吉という奉公人がいますかえ」と、半七は訊いた。

「はい、居ります。唯今奥の土蔵へ行つて居りますから、しばらくお待ちください」と、番頭らしい男が答えた。

店に腰をかけて待つてしていると、やがて奥から十四五の可愛らしい前髪が出て来た。

「おい、おめえは宗吉というのか。ちよいと番屋まで来てくれ」「はい」と、宗吉は素直に出て来た。その様子があまり落ち着いているので、半七もすこし案外に思った。

町内の自身番へ連れて行つて、半七は宗吉を詮議したが、その返事はいよいよ彼を失望させた。自分の姉は馬道の上州屋に奉公しているが、姉はちつとも自分を可愛がつてくれない。したがっ

て今までに姉から何も頼まれたことはない。姉はお洒落しやれでお転婆てんぱだから両親にも兄にも憎まれている。上州屋の使で、自分の店へ薬を買いに来ることはあつても、自分は碌に口もきかないと、宗吉はしきりに姉の讒訴ざんそをした。その申し立てはいかにも子供らしい正直なものであつた。いくら嚇しても賺すかしても宗吉はなんにも知らないと言つた。

「嘘をつくと、てめえ、獄門になるぞ」

「嘘じゃありません」

宗吉はどうしても知らないと言つて強情を張り通していた。それがまったく嘘でもないらしいので、半七はあきらめて彼をゆるして帰した。それから馬道へ行つて上州屋をたずねると、お丸は一と足

ちがいで使に出たということであつた。

下女を呼び出して、それとなく探つてみると、ここでもお丸の評判はよくなかつた。年も若いし、虫も殺さないような可愛らしい顔をしているが、人間はよほどお転婆で身持もよろしくない。現に家の若旦那うちともおかしい素振りが見える。そればかりでなく、ほかにも二、三人の情夫おとこがあるという噂もきこえている。そんなふしだらな奉公人が暇を出されないというのも、うまく若旦那をまるめ込んでゐるからである、彼女の評判はさんざんであつた。勿論それには女同士の嫉妬もまじつてゐるのであろうが、大体に於いて弟の申し立てと符合してゐるのをみると、お丸という女が顔に似合わないふしだらな人間であるのは疑いのない事実である。

らしかった。

半七は下女の口から更にこういう事実を聞き出した。上州屋の女房は両国の薬種屋の媒なかだち介でここへ縁付いたもので、その関係上、多年親類同様に付き合っている。馬道からわざわざ薬を買いにゆくのもその為である。薬種屋には与之助という今年二十二の息子があつて、上州屋へも時々遊びに来る。お丸がその与之助に連れられて、両国の観世物などを観に行つたことがあるらしいとの事であつた。

毒物の出所もそれで大抵判つたので、半七は又引つ返して両国へゆくと、宗吉は店さきに水を打っていた。息子らしい男のすがたは帳場には見えなかつた。

「おい、若旦那はどうした」と、半七は宗吉に訊いた。

「わたしが番屋から帰って来たら、その留守にどこへか行ってしまつたんです」と宗吉は云つた。

ほかの番頭に訊いても要領を得なかつた。若主人の与之助はことごろ誰にも沙汰無しに、ふらりと何処へか出てゆくことが度々ある。きようも宗吉が番屋へ引かれて行った後で、すぐに表へ出て行ったがやがて引返して来た。それから又そわそわと身支度をして何処へか出て行ったが、その行くさきは判らないとのことであつた。

半七は肚はらのなかで舌打ちした。小僧のあげられたのに怖気おしげがついて、与之助はどこへか影を隠したのではあるまいかとも疑われ

たので、彼は馬道へ又急いで行つた。そこに住んでいる子分の庄太を呼んで、上州屋のお丸の出這入りをよく見張つていろと云い付けて歸つた。

「親分、しようがねえ。お丸の奴はきのう出たぎりて今朝まで歸らねえそうです。両国の薬屋の伴もやっぱり鉄砲玉だそうですよ」

それは明くる朝、庄太から受け取つた報告であつた。自分らのうしろに暗い影が付きまどつてゐるのを早くも覺つて、男も女も姿を晦くらましたのであろう。もう打ち捨てては置かれないので、半七は両国へ出張つて表向きの詮議をはじめた。与之助の親たちや番頭どもを自身番へ呼び出して、一々きびしく吟味の末に、与之助は家の金五十両を持ち出して行つたことが判つた。信州に親類

があるので、恐らくそこへ頼って行つたのではあるまいかという見当も付いた。

「足弱あしよわ連れだ。途中で追つ付くだろう」
半七は庄太を連れて、その次の日に江戸を発つた。

四

八月はじめの涼しい夜であつた。

上州は江戸よりも秋風が早く立って、山ふところの妙義みょうぎの町には夜露がしつとりと降りおりていた。関戸屋という女郎屋のうす暗い四畳半の座敷に、江戸者らしい若い旅びとが、行燈あんどうのまえに

生なまつ白い腕をまくつて、おこんという年増としまの妓おんなに二の腕の血を洗つてもらつていた。

旅人はここに多い山蛭やまびるに吸い付かれたのであつた。土地に馴れない旅人はとかくに山蛭の不意撃ちを食つて、吸われた疵口の血がなかなか止まらないものである。妙義の妓は啣ふくみ水でその血を洗うことを知っているので、今夜の客も相方あいかたの妓のふくみ水でその疵口を洗わせていた。

「おまえさんの手は白いのね。まるで女のようにだよ」と、おこんは男の腕を薄い紙で拭きながら云つた。

「怠け者の証拠がすぐにあらわれた」と、男は笑つていた。「今夜はなんだか急に寒くなつたようだ」

「そりやあ此の通りの山の中ですもの。それにきようは霧が深かつたから、あしたは降るかも知れない」

「山越しに降られちゃあ難儀だ。お天気になるように妙義様へ祈つてくれ」

「いやさ」と、おこんも笑った。「山越しの出来ないように、あしたは抜けるほど降るがいい。妙義の山の女に吸い付かれたら、山蛭よりも怖ろしいんだから、そのつもりで腰を据えていることさ。ねえ、そうおしなさいよ」

「いや、そうは行かねえ。少し急ぎの道中だから」

「急ぎの道中なら坂本から碓氷^{うすい}へかかるのが順だのに、わざわざ裏道へかかって妙義の山越しをするお客様だもの、一日や二日は

「どうでもいい」と、おこんは意味ありげに又笑った。

男はもう黙ってしまつて、山風にゆれる行燈の火にその蒼白い顔をそむけながら、冷えた猪口ちよこをちびりちびり飲んでいた。

「なにを考えているの、おまえさん」と、おこんは膝をすり寄せた。「あたしはおまえさんが可愛いから内証で教えてあげる。さつきおまえさんがこの暖簾のれんをくぐると、少しあとからはいつて来た二人連れがあるのを知っているかえ」

男の顔はいよいよ蒼くなつた。

「その二人はどうもお前さんの為にならないお客らしいから、その積りで用心おしなさいよ」

「よく教えてくれた。ありがたい」と、男は拝むようにしてささ

やいた。「じゃあ、もうここにうかうかしちやあいられねえ。夜の更けないうちにそつと発^たたしてくれ」

「ああ、よござんす。あたしがほかの座敷へ廻っている間に、この窓からそつとぬけ出して……。今のうちに荷物をよく纏めてお置きなさいよ」

この相談が廊下に忍んでいた庄太の耳にも洩れたので、彼はすぐに自分の座敷へ引つ返して半七にささやいた。

「女が味方をしているらしいから、油断すると逃がしますぜ」

「それじゃあ俺は外へ出ている。おめえはいい頃に座敷へ踏ん込め」

打ち合わせをして置いて、半七はそつと表へ出ると、眼のさき

に支^{つか}えている妙義の山は星あかりの下に真つ黒にそそり立って、寝鳥をおどろかす山風がときどきに杉の梢をゆすつていた。大きい杉を小楯にして、半七は関戸屋の二階に眼を配っていると、やがて竹窓をめりめりと押し破るような音が低くきこえて、黒い人影が二階の横手にあらわれた。影は板葺きの屋根を這つて、軒先に突き出ている大きい百日紅^{さるすべり}を足がかりに、するすると滑り落ちて来るらしかった。

「与之助。御用だ」と、半七はその影を捕えようとして駈け寄ると、影はあと戻りをして坂路を一散に駈け降りた。半七はつづいて追つて行つた。

杉林に囲まれた坂路をころげるように駈けてゆく^と与之助は、途

彼の襟首にとどかなかつた。そのうちに長い坂ももう半分以上を越えてしまつて、法衣の袖を拵げたような黒い門は、星の光りでおぼろげに仰がれた。門のなかには石燈籠の灯が微かに見えた。

半七はもう気が気でなかつた。この坂一つを無事に越すか越さぬかは、与之助に取つても一生の運命の岐れ道わかであつた。黒門の影がだんだんに眼のまえに迫つて来るにしたがつて、与之助も急いだ。半七もあせつた。しかし与之助は運がなかつた。かれは黒門から二間ほどの手前で、石につまずいて倒れてしまつた。

「あのときには全く汗になりましたよ」と、半七老人は云つた。
「なにしろ、あの長い坂を夢中で駆け上がったんですもの、その

翌朝は足がすくんで困りましたよ。そこで、だんだん調べてみると斯ういう訳なんです。前にも申し上げた通りそのお丸という女は顔に似合わない、質たちのよくない女で、つまり今こんにち日という不良少女のお仲間なんでしょう。自分の奉公している上州屋の息子は勿論、手あたり次第に大勢の男にかかり合いを付けていて、両国の薬種屋の息子とも情交わけがあつたんです。そのうちに上州屋の息子は東山堂の娘を見そめて、三百両の支度金で嫁に貰おうということになったので、お丸は自分のふしだらを棚にあげて、ひどくそれをくやしがつて、とうとう東山堂の娘を毒殺しようとおそろしいことを巧んだのです。その毒薬は薬種屋の息子をだまして手に入れたもので、筆に塗りつけて巧く娘に舐めさせたんですが、

相手が違つて姉の方を殺してしまつたんです。むやみに毒をつけて置いても、それを姉が舐めるか妹が舐めるか判つたものじゃやないのに、随分無考えなことをしたもんですよ。悪いことをする人間には案外そんなのがたくさんありますからね。このお丸だって、あんまり利巧な奴じゃありません」

「で、そのお丸はどうしました」と、わたしは訊いた。

「お丸は使いに行くと云つて主人の家を出て、与之助のところへ逢いにゆくと、弟が丁度わたくしに引つ張られて番屋へ行つたあとで、与之助もなんだか薄気味が悪いので、店をぬけ出してうろろしているところへ、お丸がたずねて来たという訳です。お丸もその話を聴いてさすがに不安心になつて来たので、与之助をそ

そのかして何処へか駈け落ちすることになったのですが、こいつよくよく悪い奴で、なんでも中仙道に行く途中、熊谷の宿屋で男の胴巻をひっさらって姿を隠してしまつたんです。捨てられた男は一人ぼっちになつて信州へ落ちて行くところを、妙義の町でわたくし共に追い付かれて、もう一と足で黒門へ逃げ込むところを運悪く捕まつたのですが、当人ももういけないと覚悟したものの、それとも転ぶはずみに我知らず咬んだのか、私が襟首をつかまえた時には、舌を咬み切つて口から真つ紅な血を吐いていました。もとの女郎屋へ引き摺つて来て、いろいろに手当てをしてやりましたが、もうそれぎりで息を引き取つてしまいましたよ。そういう訳ですから、死人に口無しで、お丸がなんと云つて与之助から

毒薬を受け取ったのか、その辺はよく判りませんでした」

「お丸のゆくえは知れなかつたんですか」と、わたしは又訊いた。

「お丸はそれから何処をどうさまよい歩いたのか知りませんが、

やっぱり上州の赤城の山のなかに素裸で死んでいたそうです。着

物も帯も腰巻も無しで……。誰かに身ぐるみ剥はがれて、絞め殺さ

れたんでしよう。死骸の二の腕に上州屋の息子の名前が彫つてあ

つたので、お丸だということがようよう判つたのです。上州屋も

それがために飛んだ引ひきあい合あいを付けられて、ずいぶん金をつかった

ようでした。そんなわけで、舐め筆の娘との縁談も無論お流れに

なつてしまいました。東山堂もそれからけちが付いて、店もだん

だんにさびれて来ました。あすこの筆を舐めると死ぬなんて、云

い触らす奴があるからたまりませんよ。妹娘はその後に洋妾らしやめんになつたとかいう噂ですが、ほんとうだかどうだか知りません。舐め筆ではやり出した店が舐め筆でつぶれたのも、なにかの因縁でしょう」

老人の予言通り、帰る頃には雨となつた。

青空文庫情報

底本：「時代推理小説 半七捕物帳（二）」光文社文庫、光文社
1986（昭和61）年3月20日初版1刷発行

入力…tatsuki

校正…(い)ま(い)ま

1999年8月29日公開

2004年2月29日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

半七捕物帳

筆屋の娘

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫
著者 岡本綺堂
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>